

## ■要約

### 第1章 序論

本研究は以下の(1)にみるような、日本語の視覚動詞「みる」に対する研究である。この「みる」は基本義である視覚行為の意味を大幅に希薄化させ、「(物事が) 実現・成立する」といった意味を表している。(角括弧は主語名詞、下線は「目的語+「みる」を明記する。)

本研究では、これを「<実現>の「みる」」と呼ぶ。

(1) [エジプト・イスラエルの単独和平の合意だけ] が昨年3月から実施にうつされて進展をみているが……とくに [パレスチナ人民問題] は、ここ10か月間の交渉で何ら進展をみていず……

この「みる」は、上記の意味的特徴に加え、主語に非有生名詞が現れるという、他の知覚動詞にはみられない独特なふるまいを見せる。また、以下の(2)が示すように、<実現>という意味の発現も「みる」単独では表されず、主語名詞や目的語名詞との共起を前提としているという特徴が認められる。

(2) a. [エジプト・イスラエルの単独和平の合意だけが] Φ 見ているが…  
b. [パレスチナ人民問題は] Φ 見ていず…

本研究では、このような「みる」に考察対象を限定し、当該の言語現象を多角的に記述することによって、言語現象の全容を解明し、日本語における視覚動詞研究の更なる発展に貢献することを目的に分析を行った。本研究では、認知言語学 (cognitive linguistics)、なかでも、構文文法 (construction grammar)、動的用法依拠モデル (dynamic usage-based model) に立脚して分析を進めた。また、これに伴い、実際の言語使用を重視するという立場から、コーパスに基づく分析を行った。本研究がこれまでの研究と異なる点は、次の2点である。

- (I) 節レベルで考察を行った点
- (II) 通時的なアプローチを分析に導入した点

### 第2章 先行研究

この「みる」に対しては、先行研究に大きく2つの立場がある。(i) 多義動詞の意味として捉える研究 (田中 1996、高嶋 2008)、(ii) 機能動詞の意味として捉える研究 (村木 1983c, 1991、高橋 1994) である。これらの研究では、主に、当該の言語現象における意味の側面や、目的語名詞と「みる」との共起に焦点が当てられ、当該の「みる」が表す非有生の主語名詞をはじめとする諸問題について、深く追求されてこなかった。

### 第3章 現代日本語における<実現>の「みる」の分析

第3章では、現代日本語における<実現>の「みる」の分析を行った。具体的には、まず、これまでの研究に残されていた問題の1つである構成要素（主語名詞、目的語名詞、「みる」の3要素）に対する詳細な分析を行った。この中では、まず、<実現>の「みる」の目的語名詞に対して、サ変名詞のみならず語種に多様性が認められること、全てのタイプの名詞に<状態変化>に関わる意味素性が抽出されることなどを指摘した。また、先行研究で行われていた目的語名詞分類の不備を指摘し、これに代わる新たな目的語名詞分類も行った。本研究の分類尺度は、名詞の表す自他性、形態論的特徴（動詞形「する」、構文形「～をする」の接続可否）、意味的特徴（人間による<意図的関与性>の程度）の3点である。また、主語名詞に対しては、非有生名詞に加え、有生名詞が現れることも確認した。本研究では、さらに、構成要素としての「みる」についても分析を行った。ここでは、形態統語的操作によって、どの程度まで<実現>という意味が保持されるかという言語テスト中心の分析を行った。その結果、「問題が解決をみた」という表現において、「?問題が解決をようやくみた」や、「\*問題がみた解決」のような容認度の低い表現に対し、「目的語+「みる」」に対する妨害や「目的語+「みる」」からの形式的な逸脱が<実現>の意味の発現を妨げている要因であると結論づけた。また、ここでは、「進展をみながら」(<視覚>)と「進展をみる」(<実現>)の間の意味の違いについても分析を行った。「みる」は主節述語として用いられる必要がある。「進展をみながら」の「みる」のように副詞節内の述語として機能すると、<実現>の意味を発現しない。ただし、副詞節であっても、節内に生起できる要素が多い副詞節内では「みる」は<実現>の意味を発現できる。これは生起要素の多い副詞節が、より主節述語に近い性質を有しているためであると考えられる (cf. 南の階層モデル 1993)。

ここでは、また、<実現>の「みる」における、公的文書などを中心に用いられるという使用域、かな表記と漢字表記が併存しつつも、かな表記の方が優勢であるという表記の傾向、「みる」が<実現>を表す場合の頻度についても分析を行った。

次に、<実現>の「みる」の構文的特徴を明らかにした。<実現>の「みる」には、主語名詞の表す<有生性>と、目的語名詞の<意図的関与性>のそれぞれの有無によって、全部で4つの共起関係が認められる。

|               |                  |
|---------------|------------------|
| 【A】主語名詞：非有生名詞 | 目的語名詞：意図的関与が強い名詞 |
| 【B】主語名詞：非有生名詞 | 目的語名詞：意図的関与が弱い名詞 |
| 【C】主語名詞： 有生名詞 | 目的語名詞：意図的関与が強い名詞 |
| 【D】主語名詞： 有生名詞 | 目的語名詞：意図的関与が弱い名詞 |

例えば、次の(3)は【A】の特徴を示す構文である。

(3) 必ずしも盛り込まれた [提言の全てが] 意見の一致をみたものではない。

本研究では、これらはそれぞれ異なる意味と形式を持つ「構文」であると捉える。これらの構文は相互に結びつき、構文のネットワーク (network) を形成している。本研究ではまた、「日米間で合

意をみる」のような構文を「場所格構文」と呼び、この構文もまた、構文のネットワークを形成する1つの構文であると述べた。プロトタイプの認定は、用法上の制約（靛山 1995, 2003、瀬戸 2007）、出現頻度（森山・荒川・今井 2007）、ネットワーク設定時の整合性という3つの認定方法に基づき、【A】をプロトタイプの構文とした。

＜実現＞の「みる」の構文ネットワークは以下の図1の通りである。プロトタイプの構文と、【B】【C】【D】の3つの構文は「多義性のリンク」で、また、プロトタイプの構文及び【B】とのスキーマと、場所格構文は「メタファー的拡張のリンク」で関連づけられる。

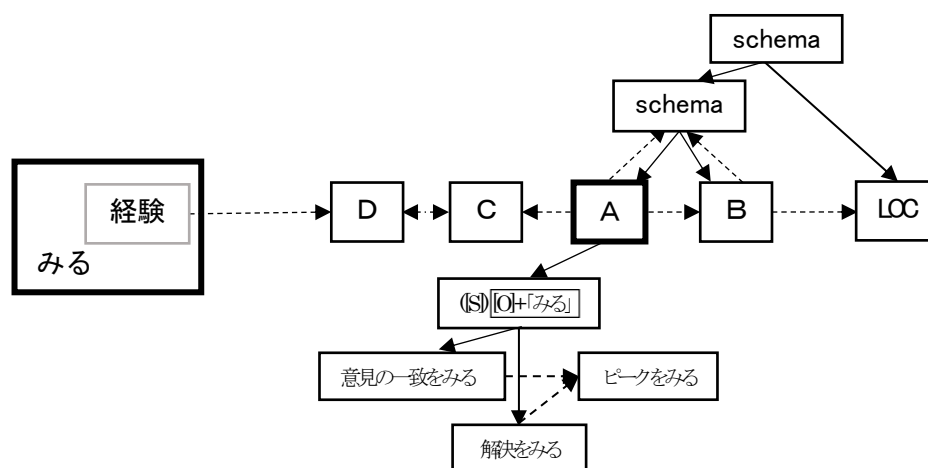


図1 <実現＞の「みる」の構文ネットワーク

#### 第4章 成立期における＜実現＞の「みる」の分析

＜実現＞の「みる」は明治中期に誕生した構文である（『日本国語大辞典（第二版）』）。そこで、第4章では、「成立期における＜実現＞の「みる」の分析」として、構文の誕生期と成立期に当たる、明治大正期を中心とした分析を行った。

具体的には、まず、現代日本語と同様、構成要素の分析を行った。この中では、特に、成立期に独自に観察される特徴を分析した。目的語名詞に対しては、現代日本語において、頻度の上で最も優勢な「一致をみる」、「合意をみる」、「解決をみる」等の表現が、明治大正期にはほぼ観察されなかったのに対し、昭和期において突如頻繁に観察されるようになったこと、「革命」「同盟」といった当時の世相を表す目的語名詞は現代日本語には継承されなかったこと、また、「革命」「同盟」に加え、「利益」「輸入」といった名詞は＜状態変化＞というよりは、変化後の結果を表していることも分かった。主語名詞に対しては、述部に指示代名詞が前接するという特徴が欧文脈の表現構造の1つであることを指摘した。最後に、「みる」について、漢字表記がかな表記を圧倒しているという結論を得た。

本研究は、＜実現＞の「みる」という構文の創発に、近代期における日本語の欧米言語（とりわけ、英語）との言語接触（language contact）が大きく関わっていると推察する。これは、＜実現＞の「みる」の誕生が明治期であり、また、次のような英語と日本語の語彙的、統語的類似が決して偶

然の産物とは思えないためである。

(3) [The year 1947] witnessed the publication of another book that had long been...

(4) [一九一四年の十二月] には其前年に於けるよりも多数の出版を見、…

本研究は、非有生の主語名詞という問題も、このような言語外的要因にその解決策を見出せると考えている。しかし、また同時に、「みる」が語彙内部で<実現>の意味を創発させているという先行研究の主張（田中 1996、高嶋 2008）も積極的に支持する。すなわち、本研究では、<実現>の「みる」が誕生、定着するに至った過程には、メタファー、メトニミーといった言語内的要因の上に、欧米言語との言語接触という言語外的要因が積み重なった複合的な拡張メカニズムが作用していると考えられる。本研究では、また、欧文脈という文体の成立が<実現>の「みる」の定着を大きく後押ししたと考える。この主張に対しては、<実現>の「みる」と欧文脈の表現構造との比較、また、<実現>の「みる」と英語動詞 *see, witness* との比較を行った。これらの分析結果から、上記の主張に対し、少なからずその可能性を示唆できたものと考えられる。

## 第5章 結論

上記をまとめ結論を示すとともに、今後の課題と展望について述べた。